

永地博正展「視座変転の器」



97年9月26日(金)～10月1日(水)
彩陶庵本館ギャラリー



ギャラリー展示風景



カップ / 台座が羊



変転鉢 / 裏返すと鉢としての用途がある



変転鉢 / 裏返すと鉢としての用途がある



変転花鉢 / ひっくり返すと・・・



高台に花の装飾が施してある



変転鉢 / これもひっくり返すと・・・



オブジェとして・・・

視座変転の器・永地博正展より

斉藤武男(彩陶庵オーナー)

タイトルにある視座変転とは、物事を見る立場、すなわち視点を変えらるということである。言葉通り普段

あまり関心を持たれない、作品の裏側に重点を置いた作品の発表なのだ。まだやきものが生まれる前、木の葉や平たい石、木切れなどを食器として使っていた時代があった。それらのものには表も裏もなかった。人間は気分によって表にしたり裏にしたのだろうと永地さんは語る。

お茶の世界では茶碗の高台は大事な見どころになっている。作為の最も出しにくい物言わぬ高台に、美の根源を発見しようとした仏教哲学的ともいえる美学の実践である。しかし現代では単に茶道の流儀として、大部分の人たちは神妙に茶碗をひっくり返して、もっともらしくうなずいてみせるという、形骸的なしきたりだけに陥ってしまっているような気がしてならない。ところが永地さんの作品の高台部分は、まるで作為の塊であると言っても良い。普段は、ひっそりと器の裏側に控えている底の部分が永地さんの手によっていきいきと躍動している。そこには固定概念になった高台信仰に対する彼の独特のアイロニーが込められているのかもしれない。

楕円の鉢をひっくり返すと魚や動物のオブジェになる。台付きの鉢を逆にしてみると台そのものが美しい花模様の皿になっていて、どっしりした台の安定感と相まってこちらの向きで使ってみたい衝動に駆られてしまう。

ぐい呑もマグカップもみな足付きで伏せてみると、いろんな動物や得体の知れないかたちが現れてオブジェの世界が展開する。

いつも楽しみながら制作しているという永地さんの楽しい器の世界が、この展覧会によって大きく展開した。彼のユーモアとアイロニーに溢れた、理屈なしに楽しい作品のシリーズを見ていると、美術だ、工芸だと、なにかとかまびすしい現代のアートシーンに、そんなの関係ないよと彼の明るい笑いが聞こえてくるような気がする。